

# のろのろと真つすぐに行く牛に託す光太郎の熱い思い

——牛はのろのろと歩く

牛は野でも山でも道でも川でも

自分の行きたいところへはまっすぐに行く

牛はただでは飛ばない、ただでは躍らない

がちり、がちりと

牛は砂を掘り石をはねとばし

やつぱり牛はのろのろと歩く

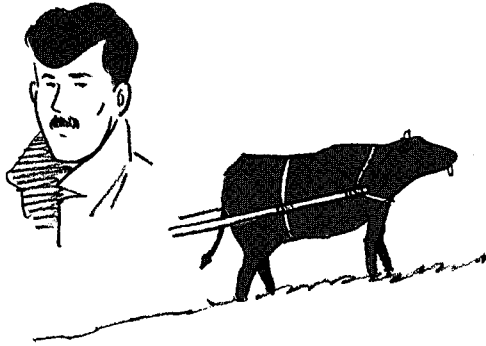
高村光太郎の「牛」と題する詩の冒頭の一節である。光太郎の詩にみられる独特の重量感、ないしはヨーロッパ的なエネルギーは、この牛の詩にもいかなくあふれている。全編百十五行のこの詩を、ゆっくりと牛の歩みのようにたどってゆくと、

牛の力は強い

しかし牛の力は潜力だ弾機ばねではない ねぢだ

坂に車を引き上げるねぢの力だ

と光太郎が歌うその「潜力」が、地熱のように伝わってくる。



光太郎を「ロダンの彫刻を思わせる裸のエネルギーに満ちた詩人」と評した人がいた。当時としては珍しい海外生活の体験をたっぷり持った彼は、食の好みもビフテキなど洋食に傾き、そこから得たエネルギーをそのままその詩に発散させた。

しかし彼の詩は、力強さだけではなく、靈的な色彩にも色どられていて、大地にしかかと立つ者の生命の鼓動と素朴な清潔さが、飾り気のない言葉と一体となって反映するのである。

利口でやさしい眼と なつこい舌と

かたい爪と 厳肅な二本の角と

愛情に満ちた嘯声と すばらしい筋肉と

正直な誕うまれを持った大きな牛

牛はのろのろと歩く

牛は大地をふみしめて歩く

牛は平凡な大地を歩く

「牛」の詩は、こうして淡々と、しかも力強く終わる。われわれの人生も、この光太郎の一編にあやかりたい。